

**連載****思い出の星空[3]  
私と母と星と…**

小野夏子（板橋区立教育科学館/  
NPO 法人こころプラネット）

**1. プロローグ**

星に興味を持つきっかけは、人によって様々でしょう。ある人は、テレビで見た「アポロの月面着陸中継」を語るでしょうし、また、ある人は、「万博で月の石を見た体験」を語るでしょう。テレビ・シリーズとして放送されたカール・セーガンの「COSMOS」に影響を受けた人もあるでしょうし、「宇宙戦艦ヤマト」や「銀河鉄道999」「機動戦士ガンダム」と言ったテレビアニメや「スター・トレック」「未知との遭遇」「E.T.」「スター・ウォーズ」といったSFがきっかけで宇宙が好きになった人もいます。「子供の頃に見に行ったプラネタリウムに感激して」などという体験を語られる方もありますね。

「私は、いつから星を好きになったか？」

「私は、いつから星空を見ているのか？」

今回「思い出の星空」…このような御題を頂いて私が考えたのは、「私が星空を見た最も古い記憶」です。遙かな記憶を遡りながら、「思い出の星空」を眺めることに致しましょう。

**2. 遡る星空**

天文教育に関わる仕事に就く前から、星空を見る機会がありました。というか、星が好きだからこういう仕事を選んだんですよね。

とはいえ、学校を卒業してすぐにこのような仕事に就いたわけではなく「天文好きな社会人」という時代もありました。やはり、「天

文好きな社会人」の仲間が居りまして…悪友というヤツです…「晴れてるよ」と平日であるにもかかわらず、夜、誘いに来てくれたりしました。知多半島で「光柱」を観測したこともありました。

大学時代には、学校に天文部を創設しました。卒業後も後輩から合宿に呼んでもらったりしていましたが…今でも残っているかなあ？ 在学中は新月近くの週末毎に、愛知県北設楽郡の東栄町御園天文科学センターへ。夏休みには、「海へ行かずに山へ行き、昼間寝ていて夜起きる」という生活を送っていました。

高校時代には、学校にあった「自然科学クラブ」という名前の部活を天文活動で乗っ取りました。また、「みんなで交代して夏休み中の流れ星の数を数えよう」という高校生の企画があり、木曾御岳の名古屋市民休暇村と自宅の間を往復していました。（自宅で何泊なんて言葉までありました。）

中学時代には、学校の天文部に所属していました。小学校5・6年の時には、名古屋科学館友の会・天文クラブ小学生クラスに所属していました。

**3. 初めて見た星空**

しかし、科学館の天文クラブに入ったから星が好きになったわけではなく、もっとそれ以前から、私は、星空を見ていました。というのも、我が家は理系家族。両親とも理系で、家族で囲む食卓の話題に科学があるような家でした。母は、美しい夕焼けが見えていると

きには、必ずといって良いほど見るようにと子供たちに勧めてくれる人でした。

古い記憶と言うのは、順序が不明確な場合が多く、どれがより昔の出来事かの判別が難しいですね。なんらかの天文現象の記憶ならばともかく「星空の記憶」ともなれば、なおさらでしょう。暗い夜空に輝く星を見た記憶…。見たものが星座であれば、季節を推測することもできますが、「何年」というのを確定するのは、難しいでしょう。

私は、小学校1年生の1学期に転居しており、昔の家での記憶ならば、それはほぼ間違いなく未就学の頃の記憶という事になります。

記憶として残っている最も古い星空は、オリオン座(図1)。昔の家で、母と見上げた冬のオリオン座です。窓辺には、シクラメンの花が咲いていました。

「なっちゃん、オリオン座よ。」

星空の記憶と共に母の声が耳の奥に蘇ります。

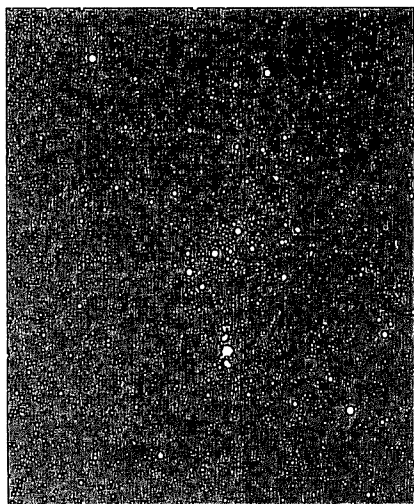


図1 オリオン座

#### 4. DNAの見た星空？

私が初めて星を見たのは、物心つく前だと思えます。さらに、どンドン時を遡っていくと、私の生まれる前の星空の話になっていき

ます。生まれる前に星を見ていた！？…いや、私の両親の話です。

私の父のアルバムを見てみましょう(図2)。学生時代の写真に混じって「土星が月に隠される」ところつまり「土星食」の写真が掲げられています(図3)。土星は環のある姿をしており、つまりこれは天体望遠鏡がなくては撮影できない写真です。父自身が撮影したのか、友人から焼き増しをしたものを貰ったのかわかりませんが(あ、本人に聞けばよいですね)、そういう写真をアルバムに貼って保存しようなどというのですから、父も只者ではありません。

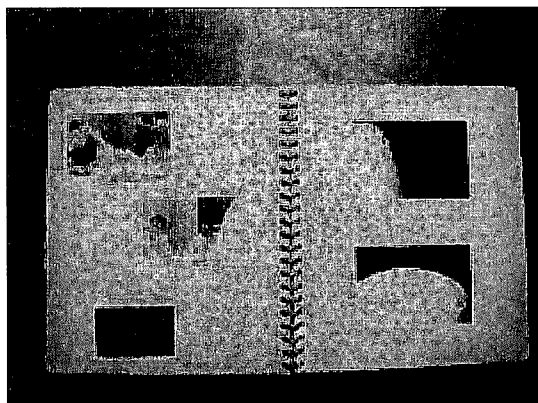


図2 父のアルバム

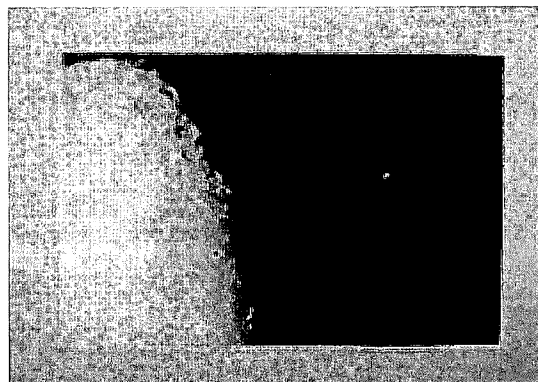


図3 土星食 おそらく1962年10月8日

一方、母はというと、女学校の頃、汽車に乗って大阪電気科学館までプラネタリウムを

見に出かけたのだそうです。女学校といえば、今の中学・高校生くらいの年齢です。当時、新幹線などはもちろんありませんでしたから、名古屋から大阪までは、女学生であった母にとっては、かなりの遠距離であったに違いありません。もっとも、当時は名古屋にはまだプラネタリウムなるものはなく（名古屋のプラネタリウムは昭和37年にできました）、大阪が彼女にとって最も近いプラネタリウムだったのでした。

まあ、両親がこんなですから、私の遺伝子を調べていただいたらどこかに「星が好き」「宇宙が好き」「プラネタリウムが大好き」と書かれているに違いありません。ヒトゲノムの解明が待たれます。

## 5. エピローグ

…2006年6月21日…夏至

6月21日は、夏至。

夏至は、「日が長い」と言いますが、一日の長さは24時間で変わりませんね。では、何が変わるかというと昼間の長さ…日の出から日の入りまでの時間が1年のうちで最も長いのが、この「夏至」の日ということです。しかし、2006年6月21日は、私にとってとても長い一日となりました。

私の2006年6月21日は、午前1時に始まりました。私が居たのは、名古屋第二日赤病院1717号室。地元では「八事日赤」と呼ばれる総合病院です。母が入院しており、私は病室に泊まりこんでの見舞いに来ていたのでした。

天文教育誌に頼まれている「思い出の星空」の原稿を母の病室で書こうと思い、病室にパソコンを持ち込みました。何か母との星空の思い出を書きたいと思ったのです。母に聞きたいことは、いろいろありました。電気科学館へ行った時の話など、母しか知らない話を。

でも、実際には、何も聞けませんでした。母の意識はあり、言葉を交わすことは出来た

のですが、なんだか、もう、どうでも良いことのように思えたのです。

午前1時、私は、看護婦さんに声を掛けられ目を覚ました。そして、母との最期の2時間を過ごしました。6月21日未明、私は、母が星の世界へ旅立つのを見送りました。天には、北十字（はくちょう座）が正中していた頃でした（図4）。

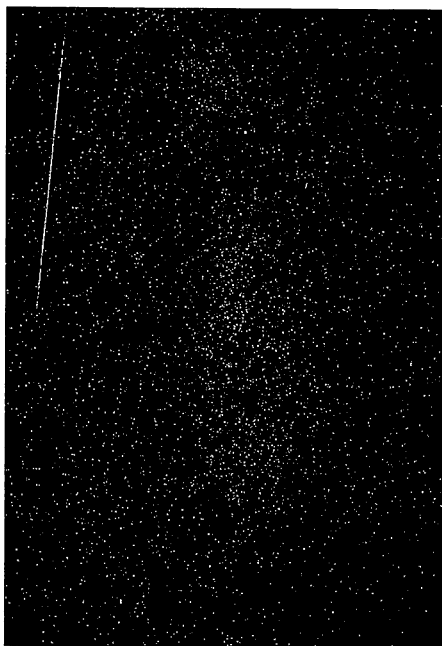


図4 北十字と流星